

第二言語コミュニケーション習得における 学習者自身の阻害要因

—中国人学習者へのインタビューを通して—

呉 小莉

Learners' Obstacles to Acquiring and Communicating in a Second Language: Experiences of Chinese Learners in Japan

WU Xiaoli

Abstract

This paper focuses on Chinese learners who are acquiring Japanese as a second language in Japan, but who have not yet achieved their goals of being able to communicate smoothly in daily life and of passing language proficiency exams. I examine why they cannot attain the level of language ability that they initially strive for. Subsequently, I will identify and categorize the obstacles holding back learners in a foreign cultural environment from communicating in Japanese.

In this research, I have used the term "learners' obstacles", that is, factors that originate internally in learners. The rationale for the idea is the tapestry approach. According to Scarcella & Oxford (1997), learning a language is similar to weaving a tapestry. The learner acquires a second language in the same way that a weaver creates a tapestry. The learner eventually completes a product, which in this case is his or her communication ability. The factors that influence the development of language ability include the cognitive, the affective and the social characteristics of the learner. Together, these factors may be considered the weft threads of the tapestry.

The research subjects comprised ten Chinese learners (6 men, 4 women), who are either currently enrolled in the Japanese Studies Program Department, or who have recently graduated from the Department and are enrolled in other departments as undergraduates. Two research methods were used. The main method consisted of unstructured, in-depth interviews; the second entailed a questionnaire which was handed to the interviewees prior to the interview. The data collected from the interviews were analyzed qualitatively in a similar way to Creswell (2003)

The obstacle factors that were identified in the research were far more varied and complex than originally expected. Twenty-six types of learners obstacles were discovered, of which 20 factors occurred in two or more learners. I assigned the factors to five categories: (1) Motivation/ autonomous learning; (2) Awareness of language learning; (3) Affective aspects; (4) Learning methods; (5) Personal factors.

Based on the results, the following proposal is made. It is important for Japanese language teachers to observe their learners, in order to identify any problems that learners have at an early stage, and then to try to resolve such obstacle factors in conjunction with the teaching institution. Furthermore, in the ideal case, it is hoped that any language instructor who reads this paper would be motivated to help their students overcome their personal learning obstacles.

(* 国際文化教育センター研究員)

1. はじめに

(1) 研究の背景

留学生別科の主要な教育目標は、大学あるいは大学院への進学を目指す留学生へ日本語教育を提供することであり、学習期間は1年となっている。ほぼ同じレベルから出発する学習者の多くは、1年間のコース終了後には、ある一定の目標に到達する¹。また、大学入学試験の際に合格できれば、学部あるいは大学院へ進学し、日本での本格的な留学生生活を始めることになる。

しかし、学習者の中には一部ではあるが、この1年間で、学習目標に到達できず、進学できない者も出てくる。そのようになった場合、彼らは以下の3つの道を選ぶ。①大学へ進学する夢を諦めず、もう一年間別科で日本語を履修し、再び挑戦する。②大学へ進学せず、その代わりに、専門学校を選択する。③日本留学を完全に断念し、帰国する。

これらは、あくまでも、学習者個人の選択肢であるが、日本語教育の現場に立つ筆者としては、学生たちが日本語学習での問題を解決できないために、当初の目標を達成できず、憧れの日本留学という夢まで放棄してしまうことに、非常に残念な気持ちを抱いている。それと同時に筆者は、学習者がなぜ第二言語学習に挫折するのか、言語習得に最適であるはずの日本社会という環境にいるにも関わらず、なぜ日本語が身に付かないのか、日本語学習において直面する困難とは何なのかという問題について問い続けてきた。そして、そこには様々な要因が絡んでいるのではないかと推測している。それらは、日本に来る以前の本国における教育の問題、来日後の日本文化への理解度の問題、学習方法の問題、学校外での生活・友人関係の問題などであろうと考えられ、本稿で学習者個人が関わっている阻害要因について詳細に検討していきたい。

研究対象者としては、中国人学習者を選んだ。その理由はまず、日本語を学ぶ留学生の中で彼らの占める割合が一番多いからである。例えば、エイ・アイ・ケイ教育情報部が公表した2004年の23大学留学生別科の留学生人数1,011人のうち、中国人学生の数は762名であり、全体の約8割に近い75%となっている²。また、筆者が勤めている教育機関では、90%以上の学習者が中国の出身である。

もう一つの理由は、この研究に取り組む筆者自身が中国人だということである。つまり、研究対象者と同じ母語を共有する立場に立つ。この意味で、筆者は日本語の母語話者ではなく、彼らと同じ第二言語学習者でもある。筆者は14年前に来日し、その時から第二言語としての日本語を学習し始めた。長い学習期間を経て、日本語と中国語はそん

なに変わらないはずだと信じていた「同文同種」の神話は崩れ去った。日本語の難しさを、日々しみじみ感じているところである。

さらに、筆者自身が日本語教育に関わる仕事に従事するようになってから7年目に入った。この経歴は、この分野では決して長いとは言えない。むしろ、未熟なキャリアであろう。しかし、現場でカリキュラムを作成し、授業を担当する日々を重ねるうちに、なぜ学習者が伸び悩むのか、その原因を辿りたいという問題意識が生まれてきた。

上述した通り、筆者が同じ母語を共有する中国人であり、第二言語学習者であること、さらに彼らに日本語を教えているという3つの立場にあることから、この研究がより意義のあるものになるのではないかと考えている。

(2) 研究の目的

1) 研究の目的

本研究では、日本において日本語を第二言語として学習している中国人学習者の中でも、特に日常生活におけるコミュニケーションに不自由しないという学習目標に到達できない学生に焦点を当てる。彼らがなぜ当初目標としていたレベルに到達できないのかについて、第二言語を学習し、それを使う者の視点から、非構造化・深層インタビューを通して諸要因を探っていく。その上で、留学生にとっての異文化環境の中で、日本語コミュニケーション習得に必要となる条件を考察し、さらには、彼らにどのような教育内容または、学習指導方法を提供すれば良いのかについても模索していきたい。

2) タペストリー理論

日本語を学習するに当たって、学習者は様々な問題に直面するであろうと推測できる。本研究では学習者個人の阻害要因を検討していく。このような考え方の根拠はタペストリー理論となる。次に、本研究と関係する第二言語習得の目的、学習者、学習に影響を与える学習者個人の原因を中心に、簡潔に紹介する。

Scarcella & Oxford (1997,p.1) によれば、言語学習はタペストリーを織ることと大変類似している。まず、言語学習とタペストリー織りは発達プロセスと関連している。第二言語能力を発達させる際に、言語学習者は、4つのスキル³を向上させるための様々な要素を身に付ける。

でき上がるタペストリーには沢山の使用目的がある。例えばそれらは、昔なら城の窓に掛けたりしたが、現在では室内の美しい装飾品として使われている。タペストリーのように、言語の学習にも様々な目的がある。例えば、新しい文化をより深く理解するた

めに、あるいは経済的・学問的な目的で学習する者がいる。

学習者は、織り工がタペストリーを織り上げるのと同じように、第二言語を身につける。学習者は、最終的には製品、ここでは、コミュニケーション能力を指す、を完成させる。

さらに、学習者の認知的、情意的、社会的な特徴も言語発達に影響を及ぼすという。これらの特徴には、学習スタイル、学習方略、動機づけ等の要因が含まれ、これらの要因によって、言語発達の個人差が生じる。これらの要因は、タペストリーを織る場合の横糸に相当する。この横糸は、細かく織り込まれ、色鮮やかな図柄となる。従って、無色の縦糸は一本も見えなくなる (Scarcella & Oxford, 1997, p.2) ¹。

当研究では、このタペストリーというメタファーを用い、学習者の横糸のような個人的な阻害要因を探っていく。個人的な阻害要因は、学習者自身が意識的にコントロールできる学習を妨げる要因であると筆者は定義する。

(3) 研究の意義

来日後、間もない20歳前後の中国人学習者が、異文化環境の中でどのような学習生活を送ることができるのか、コミュニケーション手段としての日本語をどの程度習得できるのかは、その後の日本での留学生活に多大な影響を与えられる。本研究では、中国人学習者が第二言語コミュニケーションの手段として、日本語を習得する際に直面する問題点について探究していく。この研究意義について、以下の3つの視点からアプローチしていきたい。

第1に、学習者は1年という短期間で、進学するためのアカデミック・ジャパニーズを学習しながら、日本社会で日常生活に必要な日本語を学ばなければならないという厳しい学習任務を背負っている。この学習を妨げる原因を明らかにすることにより、どのような教育内容を提供すれば良いのか、どのような指導方法を開発すれば効果的なのか、さらに、どうすれば現場の日本語教育者の役に立つのかが分かる。つまり、学習時間を効率良く利用し、学習者に相応しい内容を教え、また、学習者のニーズに合わせた科目を開講できる可能性が高まるのではないかと考えられる。

第2に、学習者自身が学習する上での主役であり、目標言語に到達できるかどうかの鍵は学習者自身が握っている (Rubin & Thompson, 1998, p.3)。もし学習者自身が自分の勉強に支障となる原因が理解できれば、どのように自分の問題点を克服するのか、どのような方法が自分に最適なのかということも、自分で考えることができる。さら

に、学習計画など勉強に対する自律学習も可能になるのではないかと考えられる。

第3に、言語学習の目標を達成させることは、日本語教師だけの仕事ではない。留学生担当の事務職員を含む留学生アドバイザーも大きな役割を担っている。彼らは学習を成功させるための生活面のサポート・精神面のケア・キャンパスライフの相談など様々な側面から、日本語学習を支援している。中国人学習者の直面する個人的な阻害要因が少しでも解明できれば、留学生の担当者や留学生アドバイザーが、どのような学習支援を提供すれば良いかの道筋も見えてくるのではないと思われる。

2. 先行研究

本研究では、第1章で紹介したようにScarcella & Oxfordのタペストリー・アプローチによる言語教育理論の概念を参考にし、研究を行う。本章では、先行研究のレビューを行う。まず、第二言語習得と第二言語コミュニケーションなどの概念を明らかにする。次に、言語学習者の役割、タペストリーの横糸となる不安・動機づけ・意志の強さ・自律学習・学習に必要となる時間への認識・外国語学習経験の影響などの要因について検討する。

(1) 第二言語コミュニケーション習得

当節では、第二言語習得と第二言語コミュニケーションの概念、または、第二言語学習における必要なコミュニケーション能力について検討していきたい。

1) 第二言語習得

Ellis (2003,p.20) は、目標言語が話されている国や地域で自然に学習しようと、学校などで授業によって学習しようと、一般的に、その言語学習を総称して、「第二言語習得」と定義している。本研究ではEllisのこの第二言語習得の定義を応用する。

2) 第二言語コミュニケーション

八島 (2004,p.41) は、応用言語学と異文化コミュニケーション研究の狭間で欠落していたものは第二言語コミュニケーション研究である、と指摘している。八島は、第二言語を用いた異文化間対人コミュニケーション行動の解明をするために、この第二言語コミュニケーションの概念を用いている。本研究では異文化環境の中で、コミュニケーションを目的として、第二言語を習得する際の問題点あるいは、困難度について検討する。

上述のような第二言語習得と第二言語コミュニケーションという2つの概念から、筆

者は第二言語習得の最終的な目的はコミュニケーションであるという視点に立ち、「第二言語コミュニケーション習得」という用語を用い、学習への阻害要因について探究を進める。

3) 第二言語学習に必要なコミュニケーション能力

Scarcella & Oxford (1990) は、コミュニケーション能力に関する研究の概観を詳しく提示した。一般的に、コミュニケーション能力とは、コミュニケーションをするための能力、あるいは才能であると理解されている (Oxford,1994,p.7)。ここで、Canal & Swainの枠組みから検討していきたい。

Canal & Swain (1980) によれば、コミュニケーション能力は、少なくとも、次の4つの領域 (知識とスキル) と関連している。それらは文法能力、社会言語学的能力、談話能力、コミュニケーション方略能力である。より具体的に言えば、文法能力とは、文法語彙知識、文法的に正しく言語を使う能力であり、社会言語学的能力とは、場面に即した適切な言語使用を可能にする知識・能力を指す。さらに、談話能力とは、談話を組み立てるのに必要な知識・能力であり、方略能力とは持っている知識を駆使して欠損した知識を補うための方略知識・能力を意味するものである³⁾。

(2) 学習者の役割

まず、学習者の役割について見ていきたい。タペストリーの理論では、言語学習者は織り工に譬えられる。織り工は糸を使い、指導者の元で、自分だけのタペストリーを織りあげる (Scarcella & Oxford,1997,p.1)。タペストリー・アプローチにおいて、学習者は、学習活動を積極的に行い、自分自身の学習を上手にコントロールし、さらに、自分の学習プロセスについて、詳細で、かつ有益な情報を教師に与えると Scarcella & Oxford (1997,p.11) は指摘している。

従って最終的に、習得ができるかどうかは学習者自身の能力と努力による。Rubin & Thompson (1998,p.3) が指摘したように、成功の鍵は、学習者自身が学習にどの程度関わるかにかかっている。上手くいかない時、学習者は教師や環境、そして教材など、自分以外のもののせいにするのがよくある。しかし、Rubin & Thompson (1998,p.17) は、外国語学習における成功、あるいは失敗の最大の原因は結局、学習者自身にあるということを知っておくべきだと述べている。

(3) 不安・動機づけ・自律学習などの学習者要因

Scarcella & Oxford (1992,p.72)によれば、言語学習者というタペストリーを織る重要な要因は、動機づけ、態度、不安、自尊心、曖昧に対する寛容性、リスク・テイクング、協力、競争、学習スタイル、学習方略など学習者の個人的要因である。これらの要因は、タペストリーの横糸に譬えられる。この横糸は、縦糸を上下に交差し、カラフルで人目を引き、言語学習のタペストリーを織る要素である。

当節では、調査対象者の問題点を意識しながら、以下の学習者個人の内面的な要因と考えられる5つの内容について検討していきたい。これらには第二言語学習に関わる不安、動機づけ、意志の強さと自律学習、学習に費やせる時間への認識、および外国語学習経験の影響が含まれている。

1) 第二言語習得に関わる不安

外国語不安は第二言語コミュニケーションに影響を与える重要な要因と考えられている。八島(2004,p.31)は、第二言語使用不安を「話者が最も自由に操る言語でない言葉、多くの場合習得の途中にある言葉を使う時に感じたり、学習する時に経験する不安」と定義している。

自分が良く知らない言語を用いて自己開示するというのは極めて心理的に脅威を感じやすい状況であるが、学習者にこれを要求すると、この不安を生起する原因になるとYoung(1999,p.5)は指摘している。つまり、言語は自己呈示、自己意識に直接関係するものである。言葉によるコミュニケーションは自己を認知し、自己を表現し、他者に対して自己を開く。それゆえに「自分が自由に操れない言葉を、自己表現することに伴う心理を十分に考慮する必要がある。言葉は習得してから使うのではなく、使いながら習得するのである」と八島(2004,p.30)は指摘している。

不安は外国語学習の認知的プロセスに影響を及ぼす。外国語学習の中で最も不安をかきたてるのは、話すことであると言われる(八島,2004,p.36)。特に、クラスメートの前で話すことが最も不安を感じさせる。

2) 動機づけ

Gardner(1985)によると、動機づけは、学習者が言語使用の機会をいかに利用するかに大きな影響を及ぼす。また、動機づけは、言語学習における1つの要因であり、その重要性を無視することはできないと言われている(Scarcella & Oxford,1992,p.73)。

動機づけには、行動などの外的要因と態度などの内的要因がある。前者には、活動目標の決定、維持、活動レベルという3つの行動要因がある。(学習者は、活動目標を設

定し、その活動に注意を払い、それに携わることを決め、かつかなり長い間それを維持する。)さらに、動機づけの心的構造も同様に重要である。この心的構造には、興味・関わり・期待感・結果という4つの態度要因があり、これらの要因(行動要因や態度要因)のいずれかが欠落したり、あるいはこれらが互いに反駁し合うと、学習者の全体的な動機づけが弱くなるとScarcella & Oxfordはまとめている(1992,p.74)。

Ellis (2003,p.136)によると、「動機づけ」は、努力の度合いに影響を及ぼす第2言語学習者の態度や情動と関連しているようである。また、動機づけには、「道具的動機づけ」、「統合的動機づけ」、「結果的動機づけ」、「内発的動機づけ」の4種類がある。

結論としては、言語学習の成功に重要な役割を果たすのは、環境と動機づけを統合したものではないかと考えられる。自転車の二輪と同様に、どちらか一つがないと、動かすことができないと考えられる。

3) 意志の強さと自律学習

Rubin & Thompson (1998,p.53)は教室外の自己学習には、厳しい自己管理と動機づけが必要であると指摘している。また、どの程度の期間自分だけで、自己学習ができるかチェックしなければならない。自己学習が上手くできる人は、目標言語の習得が上手くなる可能性があるという。Oxford (1994,p.11)によると、言語学習には学習者の自律が特に大切である。なぜなら学習者が、教室の外で外国語を使う時、いつも先生が側にいるわけではないからである。

そのため、自律学習を促し、適切なストラテジーを使う必要があると考えられる。学習者が自らの学習に対してより強い責任を持つことが大事であるとOxford (1994)は指摘している。自律学習とは学習者が自らの責任を持つにつれて、次第に高まって行く現象であるという。自律心のある学習者は、自信を高め、興味が増すにつれ、さらに高い能力を身に付けていけることになる。

4) 学習に必要なとなる時間への認識

外国語を学習するのに時間がかかることは常識的に知られている。したがって、学習に費やせる時間がどれくらいあるかについて学習者は知るべきである。Rubin & Thompson (1998,p.58)によると、語学コースを受講すると通常予習や復習など、たくさんの学習が要求されるので、実りあるものにするために十分な時間を費やせるようにしておくべきであるという。また、学習時間の大体の目安としては、授業1時間につき2時間の学習が必要と言われている。この時間には、LLでのテープ、ビデオなどの視聴覚機材、また、コンピューターを使用する自習時間、それから、クラスメート

とのグループあるいはペア学習といったものが含まれる。

5) 外国語学習経験の影響

以前に外国語を学んだ経験があると、そのことが新たに外国語を学習しようとする時に影響することがある。経験があればあるほど学習の仕方もわかっていくということである。いくつかの外国語をマスターした人は、一つ習得するごとに次の外国語の学習がしやすくなるとRubin & Thompson (1998,pp.26-27) は述べている。

今まであまり外国語を学習したことがない人は、自己学習に必要な方法がわからないかもしれない。逆に、経験があり、自分の学習法が確立している人であれば、自己学習が容易にできる可能性が高まると考えられる。

3. 研究方法

当研究では、非構造化・深層インタビューという質的調査の技法を用い、データを収集、分析した上で、考察を加える。調査については事前に対象者が属している教育機関の認可を得た。調査実施期間は2004年6月9日～8月3日である。調査対象者・調査実施手順・データの分析方法の詳細は、次の通りである。

(1) 研究対象者

研究対象者は、留学生別科に在籍中、もしくは別科を卒業し学部へ進学してまもない中国人学習者10名(男6名、女4名)とした。選択基準としては、まず、自分の日本語学習が困難であると自己申告を行った学生、また事実上、別科での1年間の学習目標を達成できず、大学への進学が不可能となったり、あるいは、日本語の実力が不足しているため、やむをえず専門学校を希望する学生をインフォーマントとして選んだ。

上述のインフォーマントのうち、2名の学生は別科を卒業後、現在学部へ進学している；3名は2年目の再履修者；2名は専門学校へ進学する予定があり、残りの3名はもう1年間別科で勉強する予定となっている再履修希望者である。インタビュー対象者の在日滞在期間は、11ヶ月から1年半の間である。また、プライバシーを尊重するため、全員匿名を使用した。分析・考察する際には、インタビューの順番を示す番号を用いた。

(2) 調査の実施手順

1) 調査対象者の選定

インフォーマントの選定方法に関しては上に述べた通りである。

2) インタビュー趣旨の説明

当調査の目的と趣旨を簡潔に説明し、それらを了解してもらった上でインタビューを行った。

3) インタビューの実施方法

①まず、個人ごとの基礎的な学習状況を把握するために、あらかじめ調査対象者に簡単な質問紙による調査を行った。質問紙の内容には、学習者個人の属性、来日目的・学習ニーズ・動機づけ・学習方法・学習環境・日本語コミュニケーション上の難易度および達成目標などが含まれる⁹⁾。

②インタビューの実施場所は、筆者の研究室、または、ゼミナール教室とした。

③インタビューは1対1で行い、時間は一人あたり平均1.5時間とした。内容はすべてカセットテープ・レコーダーに録音した。また、録音したインタビューはすべて書き起こしを行なった。さらに、作成したトランスクリプトを引用する部分は、日本語に翻訳した。

4) インタビューを実施する際、使用する言語は中国語を用いた。

5) 一回目のインタビューで被験者の情報に不足があった場合には、フォローアップ・インタビューを行った。

6) データ分析

最後に、このインタビューで収集したデータを基に内容分析を行い、留学生の日本語習得に支障となる個人要因を導き出した。

(3) 分析の方法について

収集した自由回答データは、Creswell (2003,p.192) が紹介した質的データの分析方法を参考にし、以下のようなステップで分析した。このような方法を用いれば、データに反映された諸現象から、最終的には学習者阻害要因を導き出すことが可能になると考える。

①まず、サンプルとして、文字化した1人分のデータから阻害要因と見られる全ての内容を見つけ出し、一覧表を作成する。

②次に、見つけ出された阻害要因の中から、先行研究により設定した学習者阻害要因の

みを抽出した。

③同様の方法で、5名までを分析した。

④すでに抽出された阻害要因の、それぞれの内容を再度分類した。その際、色彩を用いて識別し、類似している内容は一つの項目にまとめた。例えば、項目1は赤色、項目2は青色にした。

⑤さらに、残りの5人分を同じ方法で分析した。

⑥最終的には、全ての要因を各カテゴリーに分類した。それぞれの要因は、必ず各項目に帰属していることになる。

4. 調査の結果と考察

本章では、非構造化深層インタビューを通して、中国人学習者の個人的な阻害要因について浮かび上がった結果を、ある程度呈示することができた。まず、予備調査としての質問紙調査の結果を述べ、その上で質問紙調査に基づいて行ったインタビュー調査の結果について考察する。

(1) 質問紙調査の結果

まず、インタビュー調査を実施する直前、個人ごとの基礎的な学習状況を把握するために、調査対象者に簡単な質問紙による調査を行った。この質問紙調査から得られた結果を以下のように要約する。

1) インフォーマント個人の属性

まず、10名のインフォーマントの年齢幅は20才から26才までで、平均は22才である。出身地は中国の東北部から南部まで幅広く、遼寧省・山東省・安徽省・福建省などを含む。民族については、8名は漢民族であり、他の2名は満族である⁷。家族の子供の人数については一人っ子の者が7名で、残りの3名は3人あるいは4人兄弟の末子である。また、来日前の学歴は、高校卒業者が3名で、専門学校卒業者が7名となっている。

2) 来日前の学習状況

来日前にどのくらい日本語を学習したか、日本語の難しさに対する自覚、また日本語を学習したい理由などについて調査を行った。

まず、来日前に日本語を学習した時間には1ヶ月から1年という幅があり、平均学習期間は8.4ヶ月となる。学習の方法としては、学習者全員が日本語学校に通うことによ

って日本語を学習した。日本語の難しさへの認識としては「少し難しい」と思う者が5名、「難しい」3名、「とても難しい」2名となっている。さらに、中国にいた時、なぜ日本語を勉強したかったかという学習理由については、「留学のため」を選んだ者は6名、「仕事のため」は4名であった。

3) 学習目的・達成目標について

次に、言語学習と密着した関係にある学習目的について見て行きたい。まず、「現在、何のために日本語を学習していますか。」という質問に対して、複数回答可能としたところ、以下の回答を得た。「進学のため」という答えを選んだ者が9名、「生活のため」が4名、「日本人と話したい」が2名、そして、「アルバイトのため」という答えを選んだ者が1名となった。以上の結果から、学習者が日本語を学ぶ目的は主に「進学のため」だが、ほぼ半数の者が「生活のため」という目的を持っていることも明らかになった。

来日当初、到達したかった学習目標については、次のような回答を得た。まず、日本語能力試験の1級に合格したいという目標を持っていた者が4名で、2級に合格したかった者が5名である。1名は日本人と会話ができるようになりたかったとの目標を書いた。現在の達成目標については、以下のようなことが判明した。まず、来日1年後、1級に合格した学習者は1名である。目標が変化しない学習者が3名おり、6名の学習者には変化があった。そのうち、来日当初の目標であった「1級合格」から「2級合格」に変わった者が2名おり、逆に、2級から1級に変更した者が3名いた。また、もう1名は「日本人と会話できる」から「留学試験に合格する」へと、変更した。

4) 現在の学習状況（学習時間数・場所・言語使用の頻度等）

学習者の学校における学習時間数の自己申告や、授業の後に勉強する時間数が学習に影響を与えるであろうと想定し、質問紙で以下の調査を行った。まず、学習者自身から「大学で学習する時間数についてどう思いますか。」という質問に対して、以下の回答を得た。学習時間数が「多い」を選んだのは1名、「少ない」を選んだのが3名、「ちょうど良い」を選んだのが8名である。次に、「授業以外、毎日何時間ぐらい勉強していますか。」という質問に対しての回答は以下の通りであった。「1時間30分」勉強する者は4名で、「2時間」を選んだ者は6名いた。以上のことから、1人当たりの平均学習時間数は毎日1時間40分であった。

第3に、「授業の後、いつもどこで勉強していますか。（複数回答可）」という質問に

対して、教室が1名、図書館が1名、電車かバスの中が4名、自宅が10名との結果が得られた。第4に、「いつも誰と一緒に勉強していますか。」の質問に対する答えは、全員「一人で」を選択した。最後に、「学校以外で、日本人と話す機会は多いですか。」の質問に対して、「多い」と思う者が4名であった一方で、「そんなに多くない」(4名)と「たまにはある」(2名)を選んだインフォーマントが半数以上の6名を占めた。

5) 日本語学習の難易度

学習者の日本語に対する難易度の認識が学習の阻害要因となるのではないかと考え、質問紙調査に次の項目を入れた。まず、「日本語は難しいと思いますか。」の質問に対して、「非常に難しい」を選んだ者は2名、「難しい」が5名、「少し難しい」と思う学習者は3名となった。次に、「あなたにとって日本語のどこが一番難しいですか。(複数回答可)」の質問に対して、聴解は1名、会話は3名、読解は1名、文法は7名、敬語は3名となった。さらに、「あなたにとって日本語の話し方のスタイルで難しいのはどれですか。(複数回答可)」という質問に対して、話し方のスタイルのうち、「断り方」を選んだ者が3名、「褒め言葉」が3名、「謝罪」が2名、「察し・気配り」が2名、または、「間接表現の仕方」が8名となった。

6) 日本語でのコミュニケーション能力

「日本語で話す時、どんな時が一番困りますか。(複数回答可)」の質問に対して、以下の回答があった。①「相手の日本語が分からない時」を選んだのは1名、②「相手の話は分かるが、質問等に答えられない時」が4名、③「日本語は分かるが、意味が分からない時」が1名、④「自分が話したことが相手に理解してもらえない時」が4名いた。⑤「その他」の中に「自分の意思を完全に表現できない」または、「相手の日本語は分かるが、自分の意思を明確に表現できない」、さらに、「自分の言いたいことを正しい日本語で表現することができない」とのコメントが記入されていた。

次に、「あなたにとって、一番大事な日本語コミュニケーション能力は以下のどれですか。」の質問に対して、「相手の話しを聞いて分かる程度」の回答を選択した者は1名で、「自分の意思を大体話せる」は3名、「流暢に話せる」は3名、「日本人のように話せる」は5名であった。また、「その他」の自由記述の部分には「自分の意見を上手く伝える」という自分なりのコミュニケーション能力が記されていた。

(2) インタビュー調査の結果と考察

質問紙を実施した後、それに基づき、10名のインフォーマントにインタビュー調査を行

った。その結果を全て書き起こした。文字数は1人当たり平均1万字以上であった。インタビューを通して、10名のインフォーマントにおける内的阻害要因は26種類あるとの結果を得た。そのうち、1人のみの要因は特殊な要因と考えられるため、今回の分析からは外すことにした。2名以上に共通して得られた結果の中に、具体的な要因が20あり、それを5つの項目に分類した。分析した結果を、以下のように考察を加えて述べていきたい。

学習者阻害要因1：動機づけ・自律学習

1) 学習の動機づけを明確にしていなかった⁸

2名のインフォーマントから、学習の動機づけを明確にしていなかったという結果が得られた。#7は「僕は偉い夢を持っていません。一步前に進んだら、一步目の前のところを見るという感じです。」と言った。#1は、来日当初、勉強したかったが、勉強するための原動力がなかったようだ。その理由はいくら勉強しても効果が見えてこないからである。

この2名は、強い動機づけ、つまり、強い学習意欲を持っていないのではないかと見受けられた。大学へ進学したいと言いながら、実際、将来のために、何を勉強したいのかよく考えていなかったようだ。

2) 自発的に日本留学を選んだのではない

3名の学習者にとっては、自発的に日本留学を選択したのではないことが分かった。#5は、日本という留学先を選択したのは、日本に親戚が多いため、彼らが息子の面倒を見てくれると両親が考えたからだった。#10の場合は、すでに中国の大学へ進学していたが、真面目に勉強していないと見られ、「このままでは将来の就職が難しい」という父親の判断で、日本へ送られた。

自分自身の意志で日本へ来て学習するのではない場合、動機づけが弱く、阻害要因になるのではないかと考えられる。さらに仕方なく、来日した状況の中で、学習における困難を克服する勇気がないため、学習の速度が遅くなったのではないかと思われる。

3) 学習目的を忘れている

アルバイトに夢中になってしまったため、学習目的を忘れている者が2名いた。日

本の大学へ進学したいという目標を持ち、来日した#1には勉学の成果がなかなか見えなかった。その代わりに、アルバイトに夢中になってしまったのである。そしてアルバイトをしているうちに、何のために来日したかを忘れてしまったのである。本人は学費や生活費のためにバイトをしていなかったと言っている。では、なぜそのようになったのかという質問に対して、彼は「勉強したかったのだが、いくら勉強しても効果が全く見えてこなかった」と返答した。バイトをすれば、確実にお金を手に入れられるため、勉強とバイトを比べてみると、やはりバイトの方が効果と利益を得られる、と本人が述べた。そして、バイトをしているうちに、勉強のことを完全に忘れてしまったようだ。この問題に関連して#5は次のような発言をした。

留学の目的を常に忘れてはいけないと思います。私たちが膨大な金銭とエネルギーを使って来日したのは、バイトのためではないはずです。

様々な原因に見舞われて、学習目的を忘れてしまったのかもしれない。留学生学習者にとっては、日本語を勉強することは厳しい試練のようだ。勉強という作業の大変さと厳しさを感じながら、言語学習から逃避したいという気持ちが強かったのではないかと推測できる。

4) 意志が弱い ①遊び心が強い、自律学習ができない

4名の者は遊び心が強い、自律学習ができないと自覚している。#2は勉強できない理由は遊びたいからだと述べている。最初は、真面目に勉強したかったが、彼女一人で勉強しても、周りの皆は遊んでいるから、「そんな雰囲気になんか全然ならない」と言った。彼女としては勉強への障害となる原因を「遊びに夢中になっているから」と分析している。また、「自己コントロール力が弱い」とも付け加えた。#8の場合は、「意志が強くない」と自分に問題があることを認識できても、なかなか直せないようだ。彼女は幼い頃から、自分で自分の事をコントロールできずに、特に試験の直前に、常に親から注意を受けていたと述べた。

自律学習は学習者にとって非常に大切である。学校の勉強時間は限られているから、授業の後の勉強時間が重要であるのに、自発的に学習することができなければ学習に進展はないと言えよう。

②努力が足りない、続けられない

6名の者が自分の努力が不足しているか、または持続して学習することができないと

述べた。例えば、#7は勉強が上手くできなかった原因について、「自分の努力が足りない、あるいは、自分が努力していないかもしれない」と述べた。さらに、学習を続けてできないと言った#9は、自分に原因があると認識している。自分が三日坊主だと思いついでいる彼女は、一つのことを継続してやるのを、非常に難しく感じる。飽きやすい性格のため、常により新鮮味のあるものの方に興味を引かれやすいという。

学習者は言語学習の厳しさを充分には想像できなかったようだ。特に、初級段階から中級に進むにつれて、学ぶ文型が混乱しやすいために、危惧の念を抱くあまり、前へ進めなかったのかもしれない。いくら言語学習は楽なものではないと意識していても、困難を恐れる気持ちをどう乗り越えるかが学習者にとって大きな課題であると考えられる。

③自己コントロールができない

3名が自己コントロールできないと言った。#1の場合は、自己コントロールできないため、アルバイトをしなくても良いのに、アルバイトに夢中になってしまったと考えられる。#9が以下のように語った。

多分人間にとって一番難しいことは自分が自分をコントロールすることです。特に私にとって、非常に難しいです。自分が何をすべきかを知っているのですが、さぼりたいという気持ちだったのかもしれません。

また、#8の場合は、自分自身に問題があると認識しており、自ら変わりたいという自覚もある。しかし、自分が変わりにくいと知って、環境に期待している。環境の変化によって、自分が変わる可能性があると思っているようである。自分のために、自分に都合の良い環境を創ろうとしているとも考えられる。結局、自己コントロールができないことが、学習に集中できなかつたり、学習効果を得られないことに繋がるのではないかと考えられる。

学習者阻害要因2：言語学習に対する認識

1) 日本語の学習について難しいと予測していなかった

日本語学習の初期段階に、日本語を学ぶことがそんなに難しいと予測していなかったインフォーマントが7名いる。難しくないと考えた原因がインタビューによって明確になった。まず、来日前に、周りの友人や知人から間違った情報を教えられた。これにより、日本語の学習は簡単と思いつ込んだと4名が言った。#2を例に上げると、

「中国にいた時、先生も日本語の勉強はとても簡単だと言いました。」とのことである。

2番目の原因は、表現の仕方や文法項目が中国語とそんなに違いがないと錯覚したことである。#9は来日前、日本語の学習は難しいと思っていなかったが、今になって、徐々に難しいと感じている。特に表現の仕方が難しいと実感しているようだ。#5の場合には意味が似ている文法項目を区別することが難しかったと述べた。#13は、日本語は中国語程難しくないと思い込んだため、高い目標を設定したという。しかし暫く勉強してみると、中国語の文法と全く違うことが分かったそうだ。

3番目の原因は、日本語には中国語と共有する漢字があるため、楽にマスターできるとの先入観を持っていたようだ。これに関して、#1は以下のように解釈した。

見れば、漢字ですよ、中国語の漢字とそんなに違わないと感じました。今、振り返ってみると、全然違いますよね。しかも、中国にいた時、漢字が多いため、日本語の勉強は簡単だと周りの人によく言われました。

4番目の原因として、話す言葉と書く言葉の違いが大きいことが挙げられた。#5は直接日本人とコミュニケーションが取れないと、正真正銘の日本語を学ぶのは不可能だと述べた。#10は来日前、単語を記憶すれば日常生活程度なら大丈夫だと知人から教えてもらったそうだ。しかし来日後、文法を学習していくうちに、学習内容が莫大なだけではなく、なおかつ複雑で、益々難しく感じるようになり、対応できなくなってしまったそうだ。

以上のようなことから学習者が、日本語は中国語と「同文同種」だろうという感覚を持って、日本語を学習し始めたことが明らかになった。したがって、学習を進めていくうちに、自分が思った感覚と全く違うことに気が付き、予想がはずれ、混乱した可能性がある。このような考え方の挫折によって、以前と変わらない情熱を持って学習し続けるのが困難になったのではないかと考えられる。

2) 言語学習のメカニズムを知らない

4名のインフォーマントは語学学習のメカニズムに対して、戸惑いを感じている。つまり、言語学習自体がどういったものか分からない。#1の場合は学習したら、すぐにあるいは二日後には忘れてしまうことが多いようである。つまりなかなか覚えられないのである。#8は、勉強した内容を覚えられない、また言語に対して、自分はセンスがないのではないかという疑問を持っている。#10と#13の2人は他の者より、学習するのが非常に遅いと述べた。

学習者は一度習得した内容は、ずっと覚えていられると思いついでいたようだ。言葉は何度も繰り返さなければ記憶できないという言語学習のメカニズムに関する知識を持っていないため、言語習得が上手く進められなかったのではないかと考えられる。

3) 外国語学習歴がない

2名のインフォーマントは外国語を学習した経験がないということが分かった。2人とも高校の代わりに、同等の学歴に相当する専門学校で教育を受けた。そこでは専門知識を中心とした教育内容を学んだため、外国語に接触するチャンスがなかったとのことであり、そのせいか、意識的に外国語に対する興味を持っていないように見受けられる。

学習者阻害要因3：情意的側面

1) 分からないという不安により、学習を放棄してしまう

3名のインフォーマントは話す相手の言葉を理解できない時、恐怖感や不安を感じ、自らコミュニケーションを放棄してしまうことを経験した。例えば、#10の場合は、銀行で敬語を使って説明してくれた時、理解できない部分を2回まで聞き直すことができたが、3回目には諦めたそうである。#12は同じような状況に、学内の図書館で直面した。

このように、分からないという不安により、自ら学習チャンスを放棄する回数が徐々に増えていくに従って、学習できない内容も増加していくと見受けられる。さらに、上手く習得することもできなくなると言えよう。

2) 自分の日本語が間違っているという不安を感じる

4名のインフォーマントは自分の日本語が間違っているのではないかという不安を感じ、話せなくなったようだ。#9は、授業中、先生からある段落の意味を要約しなさいという指示を受けた時、最初の頃は口頭で大きい声で答えていたが、段々声が小さくなってしまった。なぜなら、「自分が言っている日本語が正確だったのかどうか心配になった」と本人が述べている。

さらに#13は、「話すのを間違えた」という不安を感じ、話せなくなってしまったようである。話すことを恐ろしいと自覚したら、さらに話せなくなったという。#12は間違えることを恐ろしいと感じた理由として、笑われるからと言った。「学校では、話し方

が間違っていると感じたら、もう話さない。人に笑われるのは嫌ですね。」と語った。

八島 (2004,p39) によれば、自分が十分に使えない言葉を用いて、社会的状況で「話す」、つまり自己開示をすることは容易ではない。さらに上に述べたように、「間違い」という気持ちにとらわれることが問題になっているのではないかと考えられる。つまり、「間違い」は悪いこと、正確ではないこととインプットされている。これは幼い頃から、全ての答えは正しくなければならぬと教えてきた従来中国での教育に問題があるのではないかと考えられる。

3) 自信を無くし、話す勇気がなくなる

相手に理解してもらえない時、自信がなくなり、話す勇気も無くなるという。#9は、以下のようなエピソードを語ってくれた。

バイト先である千葉大学の学生と話すチャンスがありました。普段、同じ話を他の日本人なら分かってくれますが、彼は理解してくれなかったようです。その時、私は自分の発音が理解しにくいのか、または自分の言っている日本語が間違っただかという不安を感じ、ずっと悩んでいました。もし相手が自分の話を理解してくれなかったら、2回まで質問をリピートしますが、3回目に言う勇気はないです。

自信が段々無くなると感じています。

自信は、自分自身の能力に対する確信のことである。小柳 (2004,p.185) は、自分の能力について自信を持っている場合の方が、進んでコミュニケーションをとれるため、言語学習に有効であると指摘している。学習者に、コミュニケーションを取る気が無くなれば、それは学習への悪影響となる。またインフォーマントが自分のコミュニケーション能力を低く評価する傾向があることから、自信が無くなったのではないかと考えられる。これはその後のコミュニケーションにも影響を及ぼすであろう。

4) 上手く表現できなかつたり、通じなかつたりする時、心に焦りや恥を感じる (面子を失うと感じる)

話したいことを上手く表現できなかつたり、通じ合えない時、心に焦りや恥を感じるインフォーマントが2名いる。#10の場合は、大学の食堂で話しが通じない時、自分が恥かしいと感じた。面子も失ったと語った。その理由は、もうすでに長期間をかけて勉強したのに、食べる際に使う簡単な日本語すら通じないことを非常に恥に感じてしまったからであり、自分を責めている。つまり、面子の問題である。#1は、一回通じなか

ったら、再び聞くことはできず、自分がバカにされたような嫌な気持ちになるのではないかと考えている。

言葉は人間が自分の意思を伝達するために生まれた道具であるが、第二言語で上手く自分の意思を伝えられない時は、コミュニケーションを完成できないという結末に、焦燥感を禁じ得ない。相手が自分の意思に従って行動してくれないという懸念もあるのではないかと考えられる。

5) 中国人の前で話すと緊張する

同じ中国人同士の前で日本語で話すことに緊張を感じるインフォーマントが3名いた。#3は特に、日本人の前では問題がないが、日本語の上手な中国人の前で話すのはとても恐いと感じている。もし、日本人と中国人の両方がいる場合は、中国人とはほとんど話さない。理由は「誰でも自尊心を持っているから」と説明している。

恥を感じるという感情には、自分の日本語能力を相手に評価してもらいたくない心境が作用していると同時に、バカにされたくない気持ちが働いていると考えられる。同じ国から来た人に低く評価してもらいたくないと彼が語るのは、面子があるからではないかと推測できる。

学習者阻害要因4：学習方法

1) 毎日の復習・予習のための学習時間が足りない

8名のインフォーマントは復習と予習の学習時間が足りないと述べている。#2の場合は、学習する時間が足りないために復習と予習はしていない。ただし、アルバイトのない日に限り、毎日平均2時間している。その程度の時間で足りるかという質問に対して、「もし復習だけだったら足りる。」との返答だった。#12は、アルバイトの場所が遠く、通勤する時に時間がかかり、授業後の学習時間があまり取れないようだ。#3は、毎日の学習時間は30分しかないと述べた。

このような時間は言語を習得するには、足りないのではないかと考えられる。先行研究としても紹介したように、教室で1時間の授業の後、最低2時間の復習時間が必要だとRubin & Thompson (1998,p.58)は述べている。また、一日5時間勉強して、他の日は全く勉強しないより、毎日1時間でも継続して、学ぶ方が効率はずっとよいという言語ストラテジーもある。学習時間に対する認識がないのか、あるいは学習する時間がないのかについて確かめる必要があるであろう。さらに学習時間の配分につ

いて調節することが学習者にとっては難しいと見受けられる。語学の学習は毎日少しずつ学習するのがこつである。

2) 学習計画を立てられない

教室では学習するが、個人的な学習計画を立てられないインフォーマントが2名いる。

#7は以下のように話した。

もし一日に10個の新出単語を覚えると計算して、1年間365日の間に、3650個の単語を覚えられますね。計画を立てなかったことを非常に残念に思います。もし計画を立てれば、多分僕の日本語はもっと上手になったかもしれません。これは建築と同じ原理ですね。図面がないと、工事を施行することはできないし。今は、自分の図面をまだ描けていないですね。

日本語を学習するには、学習計画を立てることが比較的重要だと考えられる。#9は以前、計画を立てたことがあったが、なかなか実行できなかったという。その原因は遊び心が強いからだと本人が言った。もう一つ推測可能な理由としては、学習者が自分の勉強は学校に任せるべきだと感じており、実は学習の成功と失敗の原因が自分自身にあることを認識できていなかったのではないかと考えられる。

3) 学習方法を知らない

半数のインフォーマントは、学習方法を知らないという苦悩を味わっている。つまり、学習方法に関する知識を把握していないようだ。#1は学習できなかった原因の一つは勉強の方法を知らないからだと言った。また#13は、自分の学習スピードが他の学生より遅いのは、自分の学習方法が正しくないからではないかとの疑問を持っている。さらに#10は、学習プロセスに関して知識を持っていないと述べた。

学習者は最初の白紙状態から、段々と少しずつ学んでいき、学習の過程を経てどう進歩するのか、また最終的にはどんな目標を達成できるのかを知りたいようだ。言葉をどう学習すれば効果的になるかは、学習者の上達と密接な関係がある。しかし、学習ストラテジーを知らないことを第二言語が上手く習得できないことと勘違いすると、それが障害要因になるのではないかと思われる。

学習者阻害要因5：個人的な要因

1) 日本人とコミュニケーションを取りたくない

3名のインフォーマントは日本人とコミュニケーションを取りたくないと言った。#9は日本人とコミュニケーションを取る意欲がなくなったようだ。初めて勉強した時は、自分の学んだわずかな日本語の単語を一つでも使って、日本人と接触したかった。しかし、日本にいる時間が長く経つに従って、話したくなくなったようだ。その理由が自分にもよく分からないと本人は困惑している。そこで、彼女は周りの友人に聞いてみたところ、皆同じ感覚を持っていることを発見したようである。#1の場合は、日本人とコミュニケーションを取りたくない原因を、日本人と同じ興味を持つ共通の話題がないからと述べた。一緒に世間話をして、話しがなかなか合わない。つまり彼が興味のあるものに相手が興味を示さない。そして相手が興味のある内容は、彼にとってつまらないと感じている。

話しをしたいかあるいはそうしたくないかという事は、コミュニケーションと深く関わる。実際に、人間はコミュニケーションをしながら言語を学習している。コミュニケーションを取らないと、上達するためのチャンスが無くなってしまう。この連鎖が、学習への阻害要因になっているのではないかと考えられる。

2) 成長期での悩みがあり、自立したい、親の負担になりたくない

6名のインフォーマントには、若者の成長期に顕著な独特の悩みがある。特に両親の負担になりたくない、自立したい気持ちを強く感じているようである。#5は家族の負担になりたくない。自分の留学のために、両親が人生をかけて貯蓄したお金の全てを使い切ることは一番して欲しくないと述べた。親の希望で留学した#10の場合は、自分はもう大人だから、生活費ぐらい自分で稼ぐべきだと次第に意識するようになったようである。

#9は以前、自分のことしか考えていなかったが、今では、両親のことをよく考えるようになった。自分の行動が親に怒られるのではないかと、迷惑をかけているのではないかといつも気にかけている。このように考え始めると、泣き出してしまうこともある。また、来日の費用を全て父親に出してもらったことに対して、非常に悪いと思っている。彼女は一ヶ月後、23歳の誕生日を迎えるため、自立するべきだと自覚している。

海保ら（2002,p.52）によると、青年期は、思春期の身体的な変化が一段落すると共

に、一人の大人としての自分を意識し始め、自分なりの自我というものを作り始める時期である。青年期の悩みは色々あるが、この学習者の場合は、家族との絆に対して強い思いがあるように見える。その理由は、一人っ子であれ、何人兄弟の末子であれ、家族からの愛情を一身に受けとめているからだと思える。初めて異国で暮らすきっかけを得て、親への配慮ができるようになったのではないかと考えられる。しかし、家族のことを考え過ぎて、悩みを乗り越えることができないような場合には、学習に支障をきたすと推測できる。

3) 留学する前の準備が不足している

2名のインフォーマントは、来日する事前の準備が不足していたと感想を述べている。留学に伴う困難には、生活面における心の準備と言語的な準備が含まれる。日本への留学を決意した時点でまず、自分の国で日本語を真面目に学習する心得が必要である。または些細な日常生活の事象に対応すること、アルバイトのためには苦勞を厭わない心の準備も必要であると#5が語った。

#1は心の準備が不足している原因について、自分で困難を十分に考えていなかったという。#5は、次々と現れて尽きない程の心配をしなければならないとは来日前、予測していなかったと述べた。留学は想像している様な気楽なことではない。特に過保護に育てられた現代の一人っ子世代にとって、それは大変厳しい試練ではないかと考えられる。

5. おわりに

(1) まとめ

本研究では、学習者を中心とする視点から、中国人日本語学習者の言語学習に影響を及ぼす個人的な阻害要因に着目し、インタビュー調査に取り組み、分析・考察した。まず、研究の背景、目的及び意義を述べた。次に、コミュニケーションとしての第二言語習得の目的から、学習者の役割、言語学習に影響を与える個人的な要因の文献レビューを行った。さらに、インタビュー調査対象者、調査の手順について説明した。最後に、質問紙調査より明らかになった点、そしてインタビュー調査の結果としての内的阻害要因を述べ、分析し、考察を行った。この調査によって、中国人学習者の第二言語習得に与える個人的な阻害要因をある程度浮き彫りにすることができた。本章では、これらの阻害要因の特徴を踏

まえつつ、結論としてまとめていきたい。

- 1) 研究の目的は、阻害要因を導き出すことである。インタビュー調査による学習者に与える阻害要因は調査以前の予想を越えて、より多種多様であり、かつ複雑であった。インタビューのデータから26種類の内的阻害要因が抽出された。この結果は、2名以上から得られた共通要因20項だけを選択し、考察した結果である。また、本稿では、一人しか持っていない個人的な要因は、特殊なもののみなし、外すことにした⁹。
- 2) 次に、インフォーマントがはっきりとした学習目的及び目標を持っていることが分かった。日本に対して興味を持っており、日本留学という道を選んだインフォーマントが7名いる。また、将来のキャリアを考えた上で日本の大学へ進学するために、日本語を学習するという明確な目標を持っている者が8名いる。
- 3) 共通的な阻害要因に関しては、内的な要因を動機づけ・自律学習、言語学習に対する認識、情意的側面、学習方法及び個人的な要因と5つの項目に分類した。そのうち、具体的な内容が20要因含まれている。
 - ①動機づけ・自律学習の項目に関連して、3名のインフォーマントが自発的に日本留学を選択したのではなく、両親の希望で来日したと述べた。また、半数以上の学習者が、意志が弱く、遊び心が強い、自律学習ができないことを自覚している。時々、学習目的を忘れてしまう場合もある。特に、自己コントロールができないのは、本人にとって重大な支障であるようだ。
 - ②言語学習に対する認識が曖昧である。まず、7名は日本語の学習について難しいと予測していなかった。しかも、言語学習のメカニズムを知らない。また8名は英語学習歴があるのに対して、2名は外国語を学習した経歴がないことが分かった。
 - ③情意的な側面としては、不安と自信に問題を抱えている。相手の話しの意味が分からないということにより、自分の日本語が間違っているのではと不安に感じたり、自信を無くしたり、話す勇気がなくなる。さらに、上手く表現できなかつたり、通じなかった時、心に焦りや恥を感じる。最悪の場合には、学習を放棄してしまう。または、中国人の前で話すと緊張してしまう。
 - ④学習方法については、半数のインフォーマントが学習方法を知らないと述べている。しかも、学習計画を立てられない。8名にとっては毎日の復習や予習に使う時間が全く足りないことが分かった。
 - ⑤個人的な要因は多様である。3名は日本人とコミュニケーションを取りたくない。6名は成長期での苦悩を抱えており、自立したい、親の負担になりたくないと述べた。

また、留学する前の事前準備が不足していたと考えている者が2名いた。

- 4) インフォーマントの中には、自分が学習できない原因は自分にあると発言する者が多くいた。その原因は一人っ子であると思われる。両親あるいは祖父母は「苦勞をさせたくない」と、彼らに特別に接してきた。彼らはこのように甘やかされた環境の中で育てられたためか、自分から努力をしない、あるいはしなくても良いと考えているようである。
- 5) 第二言語コミュニケーション能力については、半数以上のインフォーマントが日本人のように話したいとはっきり言った。つまり、綺麗な発音・話し方、そして表現の仕方も日本人のようになるのが一番理想的なコミュニケーション能力だという。
- 6) 本研究ではインタビューを通して、中国人日本語学習者の阻害要因を明確にすることができた。一方で、学習者自身にとっても、このような質問紙調査及びインタビュー調査を通して、意識していない自らの問題点を発見できるメリットがあったように思われる。これからもっと努力したいという学習意欲を湧き上がらせたのは意外な成果であった。このようなことから、今回の研究はインフォーマントの学習にも役立つのではないかと考えられる。

(2) 提言と今後の課題

今回の研究は、学習者自身の阻害要因及び学習環境における阻害要因に着目した。従来行われてきた日本語教育としての第二言語習得に関する研究内容より、学習者自身に注目して調査に取り組んだことが特徴である。本研究により、教室では見えていない学習への阻害要因が見えてきた。また今後、学習者にどのような教育を提供すれば良いかを示唆出来たのではないかと思う。このような意味から、日本語教育の現場にいる人々へ以下のように提言させて頂きたい。

- 1) 「予備教育」段階の日本語教育では、日本語能力試験などに備えて、日本語の構造体系を中心に教えることが知られている。しかし、このような学習内容を重視する日本語教育から一歩進んで、学習者本人に注目する必要があると考えられる。山田(1996,p.8)が指摘したように、留学生は日本語学習者である以前に人間であり、学生である。従って、日本語教育を提供すると同時に、思春期の青少年としての教育・指導が必要になるのではないかと痛感している。
- 2) 学習者の阻害要因を少しでも減らすには、解決方法を考えなければならない。すぐにはできないかもしれないが、問題意識を持って、少しずつ改善して行けば、学習者が

更に楽しく日本語を学ぶことができるであろう。学習者が満足できる充実した日本語教育を提供できるように、教育機関は定期的に学習者への調査を行い、学習者の精神面もケアできる体制が必要になると考えられる。

- 3) 学習者の阻害要因は、日本語教育の担当者と留学生教育の関係者が連携して取り込まなければ解決できるものではない。つまり、第二言語教育現場にいる日本語の教師だけでなく、教育機関の事務職員もできる限りの情報収集を行い、教員とも意見を交換することによって、学習者の問題をより早期に発見することが出来るであろうと考えられる。

中国人学習者が日本語を学ぶことは、決して簡単なことではない。彼らは、親族や住み慣れた生活環境から離れて日本へ渡り、莫大な時間、労力そして費用をかけて、日本語を学習する。彼らのエネルギーを他のことに使わず、日本語を学ぶことができれば、それは決して学習者本人だけの収穫ではないと思う。成功した学習者は出身国のみならず、日本社会にも貢献のできる存在である。学習者自身が持っている阻害要因をすこしでも減らすために、どのような教育内容または、学習指導方法を作成していくかが今後の課題である。

謝辞

本稿執筆にあたりまして、ご指導とご助言を賜りました先生方、または、調査にご協力くださった中国人学習者の方々に心から感謝申し上げます。

注

- 1 その目標とは、大学によっては多少違う。本学では、日本語能力試験2級以上を取得する。あるいは日本留学試験に合格し、大学入学試験に合格することである。
- 2 エイ・アイ・ケイ教育情報部編『2004日本語学校全調査』の情報を基に、筆者が統計した数字である。
- 3 この4つのスキルとはリーディング、ライティング、スピーキングとリスニングを指す。
- 4 学習者にとっては教室内のインタラクションやインプットなどの環境要因が言語発達に影響を及ぼすという (Scarcella & Oxford,1997,p.2)。タペストリーを織る場合は、環境要因は縦糸と譬えられる。この縦糸は無色であり、上下の糸巻きの間を垂直に伸び、タペストリーの基礎となる。この縦糸は、別の論文で検討する予定である。
- 5 以上の解釈は八島 (2004,p.25) の翻訳を参考した。
- 6 付録1の質問紙調査票を参照。
- 7 主に中国の東北に在住している満族は、独自の言語と文字を持っていたが、新しい世代では言葉や文化は全て漢民族とほとんど変わらないとインフォーマントから聞いた。
- 8 以下の全ての項目は付録2の「インタビュー調査結果表」を参照。
- 9 付録2の「インタビュー調査結果表」には1人のみの阻害要因を載せている。

引用・参考文献

- Arnold, J. (1999). *Affect in language learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- エイ・アイ・ケイ教育情報部編 (2004) 『2004日本語学校全調査』 東京：エイ・アイ・ケイ出版部
- Canal, M. & Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, 1, 1-47
- Creswell, J. W. (2003). *Research design: Qualitative, quantitative, and mixed methods approaches*. California: Sage Publications.
- Dornyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ellis, R. (1997). *Second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press. (牧野高吉訳 2003 『第2言語習得のメカニズム』 ちくま学芸文庫)
- Gardner, R. C. (1985). *Social psychology and second language learning: The role of attitudes and motivation*. London: Edward Ardold.
- 畑佐紀子編 (2003) 『第二言語習得研究への招待』 東京：くろしお出版
- 細川英雄 (2004) 『日本語教育は何をめざすか：言語文化活動の理論と実践』 明石書店
- 海保博之、柏崎秀子編著 (2002) 『日本語教育のための心理学』 東京：新曜社
- 久米昭元、児玉啓子、清ルミ (1998) 「コミュニケーション様式の基礎研究—日米中比較研究に向けて—」平成9年度COE形成基礎研究費研究成果報告 (2) 「先端的言語理論の構築とその多角的な実証 (2-B)」 (研究代表者井上和子)
- 小柳かおる (2004) 『日本語教師のための新しい言語習得概論』 東京：スリーエーネットワーク
- Nagata, A. L. (2003). Mindful Inquiry: A Learner-Centered Approach to Qualitative Research. *Journal of Intercultural Communication* No.6, SIETAR Japan. 23-36
- Oxford, R. L. (1990). *Language learning strategies: what every teacher should know*. Heinle & Heinle Publishers. (穴戸通庸・伴紀子訳 1994 『言語学習ストラテジー』 凡人社)
- Rubin, J. & Thompson, I. (1994). *How to be a more successful language learner*. Boston: Heinle &

- Heinle Publishers. (西嶋久雄訳 1998 『外国語の効果的な学び方』大修館書店)
- Scovel, T. (2001). *Learning new languages: a guide to second language acquisition*. Boston: Heinle & Heinle Publishers.
- Scarcella, R.C. & Oxford, R.L (1992). *The tapestry of language learning: The individual in the communicative classroom*. Boston: Heinle & Heinle Publishers. (牧野高吉監修、菅原永一ほか訳 1997 『第2言語習得の理論と実践：タペストリー・アプローチ』松柏社)
- Spolsky, B. (1989). *Conditions for second language learning*. Oxford: Oxford University Press.
- 鈴木淳子(2002)『調査的面接の技法』京都：ナカニシヤ出版
- Tarone, E. & Yule, G. (1989). *Focus on the language learner*. Oxford University Press.
- 鳥飼玖美子 (2003) 「異文化コミュニケーションに必要な言語能力」、国立国語研究所編『日本語コミュニケーションの言語問題』東京：凡人社
- 八島智子 (2004) 『外国語コミュニケーションの情意と動機』大阪：関西大学出版部
- 山田泉 (1996) 『社会派日本語教育のすすめ—異文化適応教育と日本語教育2—』凡人社
- Young, D. (1999). *Affect in foreign language and second language learning: A practical guide to creating low-anxiety classroom atmosphere*. Boston: McGraw-Hill

付録1 質問紙調査票

日本語学習についての質問紙調査票

1. 個人の属性

- (1) 氏名：_____ (2) 年齢：_____才 (3) 性別： 男 女
(4) 出身地：_____省(市) (5) 民族：_____
(6) 一人っ子： はい いいえ (7) 最終学歴：_____
(8) 卒業学校名：_____

2. 来日前の学習状況

- (1) 来日前、どのくらい日本語を勉強しましたか。
①1ヶ月 ②3ヶ月 ③6ヶ月 ④1年 ⑤一年以上 ⑥勉強していない
- (2) 来日前、日本語の勉強は難しいと思いましたか。
①とても難しい ②難しい ③少し難しい ④全然難しくない ⑤どちらとも言えない
- (3) その時、なぜ日本語を勉強したかったのですか。
①留学のため ②興味がある ③日本人と話したい ④仕事のため ⑤その他
- (4) どのような方法で日本語を勉強したのですか。
①独学で ②家庭教師 ③日本語学校 ④大学特別講座 ⑤その他

3. 来日後の学習状況

- (1) 現在、何のために日本語を学習していますか。(複数回答可)
①進学のため ②生活のため ③日本人と話したい
④アルバイトのため ⑤その他：_____
- (2) 大学で学習する時間数についてどう思いますか。
①非常に多い ②多い ③ちょうど良い ④少ない ⑤足りない
- (3) 授業以外、毎日何時間ぐらい勉強していますか。
①30分 ②1時間 ③1時間30分 ④2時間 ⑤3時間
⑥3時間以上 ⑦勉強しない
- (4) 放課後、いつもどこで勉強していますか。(複数回答可)
①教室 ②図書館 ③電車かバスの中 ④自宅 ⑤アルバイト先 ⑥近くの図書館

(5) いつも誰と一緒に勉強していますか。

- ①一人 ②クラスメート ③友人 ④家族の人 ⑤恋人

(6) 日本語は難しいと思いますか。

- ①非常に難しい ②難しい ③少し難しい ④全く難しくない ⑤分からない

(7) あなたにとって日本語のどこが一番難しいですか。(複数回答可)

- ①聴解 ②会話 ③読解 ④文法 ⑤漢字 ⑥語彙 ⑦敬語

(8) あなたにとって日本語の話し方のスタイルで難しいのはどれですか。(複数回答可)

- ①挨拶 ②断り方 ③褒め言葉 ④謝罪 ⑤察し・気配り
⑥間接的な表現の仕方 ⑦その他：_____

(9) 学校以外で、日本人と話す機会は多いですか。

- ①非常に多い ②多い ③そんなに多くない ④たまにはある ⑤全くない

(10) 来日当初、一年後の日本語到達目標は何でしたか。

- ①日本語能力試験2級合格 ②1級合格 ③日本留学生試験合格(200点以上)
④その他：_____

(11) 現段階、達成したい日本語の目標は何ですか。

- ①日本語能力試験2級合格 ②1級合格 ③日本留学生試験合格(200点以上)

4. 日本語でのコミュニケーションについて

(12) あなたにとって、一番大事な日本語コミュニケーション能力は以下のどれですか。

- ①相手の話を聞いて分かる程度 ②自分の意思を大体話せる
③流暢に話せる ④日本人のように話せる ⑤その他：_____

(13) 日本語で話す時、どんな時が一番困りますか。(複数回答可)

- ①相手の日本語が分からない時
②相手の話は分かるが、質問等に答えられない時
③日本語は分かるが、意味が分からない時
④自分が話したことが相手に理解してもらえない時
⑤その他_____

ご協力有難うございました。

記入日：2004年 月 日

付録2 インタビュー調査結果表：学習者の阻害要因

| | 学習者の阻害要因 | #2 | #3 | #8 | #9 | #12 | #1 | #13 | #5 | #7 | #10 |
|----|----------------------|----|----|----|----|-----|----|-----|----|----|-----|
| 1 | 学習の動機づけを明確にしていなかった | | | | | | ○ | | | ○ | |
| 2 | 自発的に日本留学を選ばなかった | | | | | | | | ○ | ○ | ○ |
| 3 | 一流意識ではなく、中流意識を持つ | | | ○ | | | | | | | |
| 4 | 学習目的を忘れている | | | | | | ○ | | ○ | | |
| 5 | 日本語学習が難しいと予測していなかった | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 6 | 言語学習のメカニズムを知らない | | | ○ | | | ○ | ○ | | | ○ |
| 7 | 分からないとの不安から、放棄してしまう | | | | | ○ | ○ | | | | ○ |
| 8 | 自分の日本語は間違っているという不安 | | | | ○ | ○ | | ○ | | | ○ |
| 9 | 自信を無くし、話す勇気がなくなる | | ○ | ○ | ○ | | | | | | |
| 10 | 日本人との摩擦を避けるために慎重にする | | | | ○ | | | | | | |
| 11 | 上手く表現できなかつたり、恥を感じる | | | | | ○ | ○ | | | | ○ |
| 12 | 中国人同士の前で話す緊張する | | ○ | ○ | | ○ | | | | | |
| 13 | 毎日の復習・予習の時間が足りない | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 14 | 学習計画を立てられない | | | | ○ | | | | | ○ | |
| 15 | 学習方法を知らない | | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ |
| 16 | 学習の成果を感じない | | | | | | ○ | | | | |
| 17 | 遊び心が強い、自律学習ができない | ○ | | ○ | ○ | | | | | ○ | |
| 18 | 努力が足りない、続けられない | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | |
| 19 | 自己コントロールができない | ○ | | | ○ | | ○ | | | | |
| 20 | 日本人とコミュニケーションを取りたくない | ○ | | | ○ | | ○ | | | | |
| 21 | 成長期での悩みがある(自立したいなど) | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | | ○ |
| 22 | 怠慢、勉強嫌い | | | ○ | | | | | | | |
| 23 | 留学する前の準備が不足している | | | | | | ○ | | ○ | | |
| 24 | 自己責任が不足している | | | | | | ○ | | | | |
| 25 | 外国語学習歴がない | | | | | | ○ | ○ | | | |
| 26 | 教室内に競争意識がある | | | | | ○ | | | | | |